

しやうほつくだいもくしやう
一 唱法華題目抄

ぶんおつ
文応元年五月

三十九歳御作

かまくらなしえ
於鎌倉名越

あ 有る人予に問うて云く世間の道俗させる法華經の文義を弁す

も 一部一巻・四要品自我偈一句等を受持し或は自らもよみかき

も 若しは人をしてもよみかかせ或は我とよみかかざれども經に向い

奉り合掌礼拝をなし香華を供養し或は上の如く行ずる事なき人

も 他に行ずるを見てわづかに隨喜の心をこし國中に此の經の弘ま

れる事を悦ばん、是体の僅かの事によりて世間の罪にも引かれず彼の

功德に引かれて小乗の初果の聖人の度天人に生れて而も悪道に

お 墮ちざるがごとく常に天人の生をうけ終に法華經を心得るものと成

つて十方浄土にも往生し又此の土に於ても即身成仏する事有るべき

や委細いさいに之これを聞かん、答えて云くさせる文義もんぎを弁わえたる身にはあらざれども法華經ほけきょう・涅槃經ねはんきょう並なに天台てんだい・妙樂みょうらくの釈しやくの心をもて推おし量はかるにかりそめにも法華經ほけきょうを信じて聊いささかも謗ほうを生ぜざらん人は余の惡にひかれて惡道あくどうに墮おつべしとはおぼえず、但し惡知識あくちしきと申してわづかに權教ごんきょうを知れる人・智者ちしやの由よしをして法華經ほけきょうを我等が機かなに叶がたい難がたき由よしをやわらもつ和やわらげ申もつさんを誠まことと思おもひて法華經ほけきょうを隨喜ずいきせし心を打ち捨て余教よきょうへうつりはてて一生いっしやうさて法華經ほけきょうへ歸り入らざらん人は惡道あくどうに墮おつべき事ことも有りなん、仰おほせに付ついて疑うたがはしき事こと侍り実まことにてや侍るらん法華經ほけきょうに説とかれて侯そつまつとて智者ちしやの語かたらせ給たまいしは昔さんぜんじんてなごう三千塵点劫そのかみの当初だいつつちしきうぶつ・大通智勝おうちしきやうぶつ仏ぶつと申まをす仏ぶついます其その仏ぼんぶの凡夫ぼんぶにていましける時とき十六人の王子おうちしをはします、彼の父ちちの王おう・仏ぶつにならせ給たまひて一代いちだいしきうきやう・聖教せいきやうを説とき給たまいたまい十六人の王子おうちしも亦また出家しゅつけして其その仏おんでしの御弟子おんでしとならせ給たまいけり、大通智勝だいつつちしきやうぶつ・佛ぶつ・

法華經を説き畢らせ給いて定に入らせ給いしかば十六人の王子の
 沙弥其の前にしてかはるがはる法華經を講じ給いけり、其の所説を
 聽聞せし人幾千万といふ事をしらず当座に悟をえし人は不退の位
 に入りなき、又法華經をおるかに心得る結縁の衆もあり其の人人
 当座中間に不退の位に入らずして三千塵点劫をへたり、其の間又つ
 ぶさに六道・四生に輪廻し今日・釈迦如来の法華經を説き給うに
 不退の位に入る所謂・舍利弗・目連・迦葉・阿難等是なり猶猶信心薄
 き者は當時も覺らずして未来無数劫を経べきか知らず我等も
 大通智勝仏の十六人の結縁の衆にもあるらん此の結縁の衆をば天台
 妙樂は名字觀行の位にかなひたる人なりと定め給へり名字觀行の
 位は一念三千の義理を弁へ十法成乘の觀を擬し能義理を弁えた
 る人なり一念隨喜・五十展轉と申すも天台・妙樂の釈のごときは皆

観行五品の初随喜の位と定め給へり博地の凡夫の事にはあらず然る
に我等は末代の一字・一句等の結縁の衆一分の義理をも知らざらん
は豈無量の世界の塵点劫を経ざらんや是れ偏えに理深解微の故に教
は至つて深く機は実に浅きがいたす処なり只弥陀の名号を唱えて
順次生に西方極楽世界に往生し西方極楽世界に永く不退の無生忍
を得て阿弥陀如来 観音 勢至等の法華経を説き給わん時聞いて悟を
得んには如かじ然るに弥陀の本願は有智・無智・善人・悪人・持戒・
破戒等をも扱はず只一念唱うれば臨終に必ず弥陀如来・本願の故
に來迎し給ふ是を以て思うに此の土にして法華経の結縁を捨て浄土
に往生せんとをもふは億千世界の慶点を経ずして疾法華経を悟る
がためなり法華経の根機にあたはざる人の此の穢土にて法華経にいと
まをいれて一向に念仏を申さざるは法華経の証は取り難く極楽の業

は定まらず中間ちゆうげんになりて中中法華經なかなかほけきょうをおるそかにする人にてやおは
しますらんと申し侍るはへは如何いかんに、其の上ただ只今承り候たまわは僅そつひに法華經の
結縁計けちえんばかりならば三 惡道さんあくなぐちうに墮おちざる計はたりにてこそ候そつひろくとう六道しじうじの生死しじうじを出る
にはあらず、念仏ねんぶつの法門ほつもんはなにと義理ぎりを知らざれども弥陀みだの名号みちうけうを
となとな奉たてまつれば浄土じやうどに往生おつじやうする由よしを申すは遙はるかに法華經ほけきょうよりも弥陀みだ
名号みちうけうはいみじくこそ聞え侍れ、答えて云いわく誠まことに仰おほせめでたき上智者ちしやの
御物語おんものがたりにも侍るはへなればさこそと存ぞつひじ候たまども但ただし若もし御物語おんものがたりのごと
く侍らばすこし不審ふしんなる事侍り、大通結縁だいつうけちえんの者をあらあらうちあて
がい申すには名字みなな觀行くわんぎやうの者とは釈しゃくせられて侍れども正ただしく名字みなな即そく
位の者みと定められ侍る上退大取小たいたいしじょうの者まとて法華經ほけきょうをすてて權教けんぎやうにつ
つり後のちには惡道あくちうに墮おちたりと見えたる上正まさしく法華經ほけきょうを誹謗ひぼうして
之これを捨てし者まなり、設たごえ義理ぎりを知るようなる者まなりとも謗法ぼうぽうの人に

あらん上は三千塵点無量塵点も経ふりべく侍はべるか、五十展転一念随喜いちじゅうごつてんでん 一念をすいぎの
 人人を觀行初随喜ひとびと かんぎょうしじゆすいぎの位の者と釈しゃくせられたるは末代の我等まつだい われらが随喜等すいぎは
 彼の随喜すいぎの中には入いる可べからずと仰おほせ候まうすか、是これを天台・妙樂・初随喜みづうく じゆすいぎ
 の位と釈しゃくせられたりと申まうすさるるほどにては又名字即なみ じゆくと釈しゃくせられて
 侍はべる釈しゃくはすてらるるべきか、所詮しよせん仰おほせの御義おんぎを委くわく案あんずればをそれにて
 は候まうすへとも謗法ぼうぼうの一分いちぶんにやあらんずらん其そのゆえゆえは法華經ほけきょうを我等われら末代まつだい
 の機かなに叶がた難がたき由よしを仰おほせ候まうすは末代まつだいの一切衆生いっさいしゆじやうは穢土えいどにして法華經ほけきょうを
 行いじて詮せん無なき事ぎなりと仰おほせらるるにや、若もしさやうしやうに侍はべらば末代まつだいの
 一切衆生いっさいしゆじやうの中に此の御詞ごごを聞ききて既すでに法華經ほけきょうを信しんずる者ものも打ち捨うちすて
 て未なだ行いぜざる者ものも行いぜんと思おもつべからず随喜すいぎの心こころも留とどめ侍はべらば
 謗法ぼうぼうの分ぶんにやあるべかるらん、若もし謗法ぼうぼうの者ものに一切衆生いっさいしゆじやうなるならば、
 いかいかにに念仏ねんぶつを申まうすさせ給たまつとも御往生ごおんじやうは不定ふぢやうにこそ侍はべらんずらめ又

弥陀みだのなごうをうたへげんらくせせかいにじうをとぐべきよしをおせられ侍るは
 何いかなる経論を証拠しとして此の心はつき給たまいけるやらん正まくつよき
 証し文せ候せか若しなくば其の義たのもしからず、前に申し候いつるがごと
 く法華経を信はじ侍るはさせる解なけれども三 惡道には墮だすべから
 ず侯六道を出る事は一分のさとりなからん人は有り難く侍るか、
 但ただし悪知ち識しに値つて法ほ華け経を隨ず喜いの心を云いやぶられて侯はんは力
 及およばざるか又おお仰せに付いて驚き覚え侍り其の故は法華け経は末まつ代だいの
 凡ぼん夫ぶの機に叶い難き由を智者ち申しされしかばさかと思い侍る処に只今
 の仰せの如ごとくならば弥陀みの名号なごうを唱つとも法華ほ華け経をいゐつとむると
 がによりて往生じうをも遂とげざる上惡あく道どうに墮つべきよし承るはゆゆしき
 大だい事じにこそ侍れ、抑 大だい通つう結け縁えんの者は謗法ぼうの故に六道どうに回るも又
 名な字じ即そくの浅位せんの者なり又一い念ねん隨ず喜ぎ五ご十じゆ展てん轉てんの者も又名な字じ觀くわん行ぎやう即そくの

位と申す釈は何の処に候やらん委く承り候はばや、又義理をも知らざる者僅かに法華經を信じ侍るが悪智識の教にて法華經を捨て權教に移るより外の世間の悪業に引かれては悪道に墮つべからざる由申さるるは証拠あるか、又無智の者の念仏申して往生すると何に見えてあるやらんと申し給うこそよに事あたらしく侍れ、雙觀經等の浄土の三部經・善導和尚等の經釈に明かに見えて侍らん上はなにか疑い給うべき、答えて曰く大通結縁の者を退大取小の謗法・名字即の者と申すは私の義にあらず天台大師の文句第三の卷に云く、「法を聞いて未だ度せず而して世世に相値うて今に声聞地に住する者有り即ち彼の時の結縁の衆なり」と釈し給いて侍るを、妙樂大師の疏記第三に重ねて此の釈の心を述べ給いて云く、「但全く未だ品に入らず、俱に結縁と名づくるが故に」文・文の心は大通結縁の者は名字即の者

となり、又天台大師の玄義の第六に大通結縁の者を釈して云く「若しは信若しは謗因つて倒れ因つて起く喜根を謗すと雖も後要らず度を得るが如し」文・文の心は大通結縁の者の三千塵点を経るは謗法の者なり例せば勝意比丘が喜根菩薩を謗せしが如しと釈す五十展転の人は五品の初めの初随喜の位と申す釈もあり、又初随喜の位の先の名号即と申す釈もあり疏記第十に云く「初めに法会にして聞く是れ初品なるべし第五十人は必ず随喜の位の初めに在る人なり」文・文の心は初会聞法の人は必ず初随喜の位の内第五十人は初随喜の位の先の名号即と申す釈なり。

其の上五種法師にも受持・読・誦・書写の四人は自行の人・大經の九人の先の四人は解無き者なり解説は化他後の五人は解有る人と証し給へり、疏記第十に五種法師を釈するには「或は全く未だ品に入

ららずに又云く「一向未だ凡位に入らずに文・文の心は五種法師は觀行
 五品と積すれども又五品已前の名字即の位とも積するなり、此等の
 積の如くんば義理を知らざる名字即の凡夫が随喜等の功德も經文の
 一偈・一句・一念隨喜の者五十展轉等の内に入るかと覺え候、何に
 況や此の經を信ぜざる謗法の者の罪業は譬喩品に委くとかれたり
 持經者を謗する罪は法師品にとかれたり、此の經を信ずる者の功德
 は分別功德品隨喜功德品に説けり謗法と申すは違背の義なり隨喜
 と申すは隨順の義なりさせる義理を知らざれども一念も貴き由申
 すは違背隨順の中には何れにか取られ候べき、又未代無智の者のわづ
 かの供養隨喜の功德は經文には載せられざるか如何、其の上天台・
 妙樂の積の心は他の人師ありて法華經の乃至童子戲・一偈・一句
 五十展轉の者を爾前の諸經のごとく上聖の行儀と積せられたるを

ば謗法の者と定め給へり、然るに我が釈を作る時機を高く取りて未代
造悪の凡夫を迷はし給わんは自語相違にあらざるや故に妙楽大師
五十展転の人を釈して云く「恐らくは人謬りて解せる者初心の功德の
大なる事を測らず而して功を上位に推り此の初心を蔑る故に今彼の
行浅く功深き事を示して以て経力を顕わす」文・文の心は謬つて
法華経を説かん人の此の経は利智精進・上根・上智の人のためといは
ん事を仏をそれて下根・下智・未代の無智の者のわづかに浅き随喜の
功德を四十余年の諸経の大人上聖の功德に勝れたる事を顕わさん
として五十展転の随喜は説かれたり、故に天台の釈には外道・小乗・
権大乘までたくらべ来て法華経の最下の功德が勝れたる由を釈せり、
所以に阿竭多仙人は十二年が間恒河の水を耳に留め耆毘仙人は一
日の中に大海の水をすいほす此くの如き得通の仙人は小乗・阿含経

三賢の浅位の一通もなき凡夫には百万倍劣れり、三明六通を得たりし小乗の舍利弗・目連等は華嚴・方等・般若等の諸大乘經のみだんさんなく未断三惑の一通もなき一偈・一句の凡夫には百万倍劣れり華嚴・方等・般若經を習い極めたる等覺の大菩薩は法華經を僅かに結縁をなせる未断三惑・無悪不造の未代の凡夫には百万倍劣れる由釈のけんねんなりしかとうせねんぶつにうまひやくせんまんばいおと文顯然也、而るを当世の念仏宗等の人。我が身の權教の機にて実經を信ぜざる者は方等・般若の時の二乗のごとく自身をはぢしめてあるべき処に敢えて其の義なし、あまつさへ世間の道俗の中に僅かに觀音品自我偈などを読み適父母孝養などのために一日經等を書く事あればいゝさまたげて云く善導和尚は念仏に法華經をまじうるを雜行と申し百の時は希に一二を得千の時は希に三五を得ん乃至千中無一と仰せられたり、何に況や智慧第一の法然上人は法華經

等を行ずる者をば祖父の履そふくつ、或は群賊等ぐんぞくにたとへられたりなんどい
うとめ侍るは是はくの如ごとく申もうす師でしも弟子でしも阿鼻あびの焰ほのおをや招まねかんずら
んと申もうす。

問いわうて云いく何いかなるすがた並なに語ことばを以もつてか法華經ほけきょうを世間せけんにいぬつと

むる者ものには侍はるやよにおそろしくこそおぼえ候まうへ答こたえて云いく始めはじめに

智者ちしやの申もうされ候まうと御物語おんものがたり候まういつるこそ法華經ほけきょうをいぬつとむる悪知識あくちしき
の語ことばにて侍はれ、末代まつだいに法華經ほけきょうを失うしなうべき者は心こころには一代いちだい聖教しんぎょうを知し

りたりと思しいて而しかも心こころには権実ごんじつ二經にきょうを弁わきまえず身みには三衣さんい一鉢いちぱつを帶おし

或あるは阿練若あれんにやに身みをかくし、或あるは世間せけんの人ひとにいみじき智者ちしやと思しはれて

而しかも法華經ほけきょうをよくよく知る由よしを人ひとに知られなんとして世間せけんの道俗どうぞくに
は三明六通さんみりくつうの阿羅漢あらかんの如ごとく貴たつばれて法華經ほけきょうを失うしなうべしと見みえて候まう。

問いわうて云いく其その証拠しんこ如何いかに、答こたえて云いく法華經ほけきょう勸持品かんじほんに云いく諸もろの

無智の人悪口罵詈等し及び刀杖を加うる者有らん我等皆当に忍ぶ
べし文・妙楽大師・此の文の心を釈して云く「初めの一行は通じて
邪人を明す、即ち俗衆なり」文・文の心は此の一行は在家の俗男・
俗女が權教の比丘等にかたらはれて敵をすべしとなり、經に云く
「悪世の中の比丘は邪智にして心諂曲に未だ得ざるを為得たりと謂い
我慢の心充滿せん」文・妙楽大師・此の文の心を釈して云く「次の一行
は道門増上慢の者を明す」文・文の心は悪世末法の權教の諸の比丘
我れ法を得たりと慢して法華經を行ずるもの敵となるべしといふ事
なり、經に云く「或は阿練若に納衣にして空閑に在つて自ら眞の道を
行ずと謂いて人間を輕賤する者有らん利養に貪著するが故に白衣
の与に法を説き世に恭敬せらるる事六通の羅漢の如くならん是の人
悪心を懷き常に世俗の事を念い名を阿練若に仮りて好んで我等が過

を出さん而も是くの如き言を作さん此の諸の比丘等は利養を貪るを
為つての故に外道の論義を説き自ら此の經典を作りて世間の人を
誑惑す名聞を求むるを為つての故に分別して是の經を説くと、常に
大衆の中に在りて我等を毀らんと欲するが故に国王・大臣・婆羅門・
居士及び余の比丘衆に向つて誹謗して我が悪を説いて是れ邪見の人
外道の論議を説くと謂わんと已上妙樂大師此の文を釈して云く「三
に七行は僭聖増上慢の者を明す文・經並に釈の心は悪世の中に多
くの比丘有つて身には三衣一鉢を帶し阿練若に居して行儀は大迦葉
等の三明六通の羅漢のごとく在家の諸人にあふがれて一言を吐けば
如来の金言のごとくをもはれて法華經を行ずる人をいゝやぶらんが
ために国王・大臣等に向ひ奉つて此の人は邪見の者なり法門は邪法な
りなんどいゝつとむるなり。

かみ
 上の三人の中に第一の俗衆の毀よりも第二の邪智の比丘の毀は
 なお
 猶しのびがたし又第二の比丘よりも第三の大衣の阿練若の僧は甚
 し、此の三人は当世の權教を手本とする文字の法師並に諸經論の
 言語道断の文を信ずる暗禪の法師並に彼等を信ずる在俗等
 よんじゆつうのねん
 四十余年の諸經と法華經との權実の文義を弁へざる故に、華嚴・
 ほうつとう
 方等般若等の心仏衆生・即心是仏・即往十方西方等の文と法華經
 の諸法実相即往十方西方の文と語の同じきを以て義理のかはれる
 を知らず、或は諸經の言語道断・心行所滅の文を見て一代聖教に
 は如来の實事をば宣べられざりけりなんどの邪念をおこす、故に悪鬼
 此の三人に入つて末代の諸人を損じ国土をも破るなり故に經文に
 いわ
 云く「濁劫悪世の中には多く諸の恐怖有らん悪鬼其の身に入つて我
 を罵詈し毀辱せん乃至仏の方便随宜所説の法を知らず、文の心は

濁悪世の時比丘我が信ずる所の教は仏の方便随宜の法門ともしらず
して権実を弁わきまえへたる人出来すれば詈り破しなんどすべし、是偏に悪鬼
の身に入りたるをしらずと云うなり、されば末代の愚人の恐るべき事
は刀杖・虎狼・十悪・五逆等よりも三衣一鉢を帯せる暗禅の比丘と
並に権經の比丘を貴しと見て実經の人をにくまん俗侶等なり。
故に涅槃經二十二に云く、悪象等に於ては心に恐怖する事無かれ
悪知識に於ては怖畏の心を生ぜよ何を以ての故に是悪象等は唯能く
身を壞りて心を破ること能わず悪知識は二俱に壞るが故に乃至
悪象の為に殺されては三趣に至らず悪友の為に殺されては必ず三趣
に至らんいた文 此文の心を章安大師宣べて云く、諸の悪象等は但是れ
悪縁にして人に悪心を生ぜしむる事能わず悪知識は甘談詐媚巧
言令色もて人を牽ひいて悪を作さしむ悪を作すを以ての故に人の善心

を破る之を名づけて殺と為す即ち地獄に墮す。文、文の心は悪知識
と申すは甘くかたらひ詐り媚び言を巧にして愚癡の人の心を取つて
善心を破るといふ事なり、総じて涅槃經の心は十悪・五逆の者よりも
謗法闡提のものをおそるべしと誡めたり闡提の人と申すは法華經・
涅槃經を云いつとむる者と見えたり、当世の念仏者等・法華經を知
り極めたる由をいふに因縁譬喩をもて釈しよくよく知る由を人にし
られて然して後には此の經のいみじき故に末代の機のおろかなる者
およびざる由をのべ強き弓重き鎧かひなき人の用にたたざる由を申せ
ば無智の道俗さもと思いて實には叶うまじき權教に心を移して僅か
に法華經に結縁しぬるをも翻えし又人の法華經を行ずるをも隨喜せ
ざる故に師弟俱に謗法の者となる。

之れに依つて謗法の衆生・國中に充滿して適仏事をいとなみ

法華經を供養し追善を修するにも念仏等を行ずる謗法の邪師の僧
来て法華經は末代の機に叶い難き由を示す、故に施主も其の説を實
と信じてある間訪るる過去の父母夫婦兄弟等は弥地獄の苦を増
し孝子是不孝謗法の者となり聴聞の諸人は邪法を随喜し悪魔の眷属
となる、日本國中の諸人は仏法を行ずるに似て仏法を行ぜず適
仏法を知る智者は国の人に捨てられ守護の善神は法味をなめざる
故に威光を失ひ利生を止此の国をすて他方に去り給い、悪鬼は便り
を得て國中に入り替り大地を動かし悪風を興し一天を悩し五穀を
損ず故に飢渴出来し人の五根には鬼神入つて精気を奪ふ是を疫病と
名く一切の諸人善心無く多分は悪道に墮つることひとへに悪知識の教
を信ずる故なり、仁王經に云く「諸の悪比丘多く名利を求め國王・
太子・王子の前に於て自ら破仏法の因縁、破国の因縁を説かん其の王

わきま 別えずして此の語を信聴し横に法制を作りて仏戒に依らず是れを
はぶつ はこく 破仏 破国の因縁と為す文、文の心は末法の諸の悪比丘国王・大臣
おんまえ の御前にして国を安穩ならしむる様にして終に国を損じ仏法を弘む
かえ ぶつぼう うしな する様にして還つて仏法を失うべし、国王・大臣此の由を深く知し食さ
しんごゆ せずして此の言を信受する故に国を破り仏教を失うと云う文なり。此
にちがつ の時 日月度を失ひ時節もたがひて夏はさむく冬はあたたかに秋は
あくふう あくふう 悪風吹き赤き日月出で望朔にあらずして日月蝕し、或は二二三等の
しゆたい 日出来せん大火・大風・彗星等をこり飢饉疫病等あらんと見えた
あくじゆ り、国を損じ人を悪道にをとす者は悪知識に過ぎたる事なきか。
いわ 問うて云く始めに智者の御物語とて申しつるは所詮後世の事の疑
ゆえ せんあく もつ 問うて云く始めに智者の御物語とて申しつるは所詮後世の事の疑
うけたまわ わしき故に善悪を申して承らんとためなり、彼の義等は恐ろしき事に
いちもんぶつ があるにこそ侍るなれ一文不通の我等が如くなる者はいかにしてか

法華經に信をとり候べき又心ねをば何様に思い定め侍らん、答えて云く此の身の申す事をも一定とおぼしめさるまじきにや其の故はかやうに申すも天魔・波旬・悪鬼等の身に入つて人の善き法門を破りやすらんとおぼしめされ候はん一切は賢きが智者にて侍るにや。

問うて云く若しかやうに疑い候はば我身は愚者にて侍り万の智者の御語をば疑いさて信ずる方も無くして空く一期過し侍るべきにや、答えて云く仏の遺言に依法不依人と説かせ給いて候は經の如くに説かざるをば何にいみじき人なりとも御信用あるべからず候か、又依了義經不依不了義經と説かれて候は愚癡の身にして一代聖教の前後浅深を弁えざらん程は了義經に付かせ給い候へ了義經不了義經も多く候阿含・小乘經は不了義經華嚴・方等般若淨土の觀經等は了義經、又四十余年の諸經を法華經に対すれば

不了義經 法華經は了義經、涅槃經を法華經に對すれば法華經は
 了義經、涅槃經は不了義經、大日經を法華經に對すれば大日經は
 不了義經法華經は了義經なり、故に四十余年の諸經並に涅槃經を
 打ち捨てさせ給いて法華經を師匠と御憑み候へ法華經をば國王・
 父母・日月・大海・須弥山・天地の如くおぼしめせ、諸經をば閔白・
 大臣・公卿乃至万民・衆星・江河・諸山・草木等の如くおぼしめすべ
 し、我等が身は末代造悪の愚者 鈍者 非法器の者、國王は臣下より
 も人をたすくる人父母は他人よりも子をあはれむ者日月は衆星より
 暗を照らす者 法華經は機に叶わずんば況や余經は助け難しとおぼ
 しめせ、又釈迦如来と阿弥陀如来・薬師如来・多宝仏・觀音・勢至・
 普賢・文殊等の一切の諸仏・菩薩は我等が慈悲の父母 此の仏菩薩の
 衆生を教化する慈悲の極理は唯法華經にのみとどまれりとおぼしめ

せ、諸経は悪人・愚者・鈍者・女人・根欠等の者を救ふ秘術をば未だ
と説き顕わさずとおぼしめせ法華經の一切經に勝れ候故は但此の事
に侍り、而るを当世の学者・法華經をば一切經に勝れたりと讚めて
しか、而も末代の機に叶わずと申すを皆信ずる事豈謗法の人に侍らずや、
ただ只一口におぼしめし切らせ給い候所詮法華經の文字を破りさきな
んどせんには法華經の心やぶるべからず、又世間の悪業に對して云い
うとむるとも人人用ゆべからず只相似たる權經の義理を以て云いつ
とむるにこそ人はたばらかさるれとおぼしめすべし。

問うて云く、或智者の申され候しは四十余年の諸經と八箇年の
法華經とは成仏の方こそ爾前は難行道・法華經は易行道にて候へ
おつじ、往生の方にては同事にして易行道に侍り法華經を書き讀みても十方
の淨土阿弥陀仏の国へも生るべし觀經等の諸經の付いて弥陀の名号

を唱えん人も往生を遂ぐべし只機縁の有無に随つて何をも争ふべからず、但し弥陀の名号は人ごとに行じ易しと思ひて日本国中に行じつきたる事なれば法華経等の余行よりも易きにこそと申されしは如何、答えて云く仰せの法門はさも侍るらん又世間の人も多くは道理と思ひたりげに侍り但し身には此の義に不審あり、其の故は前に申せしが如く末代の凡夫は智者と云つともたのみなし世こそりて上代の智者には及ぶべからざるが故に愚者と申すともいやしむべからず
 経論の証文顯然ならんには抑無量義経は法華経を説くが為の序分なり、然るに始め寂滅道場より今の常在靈山の無量義経に至るまで其の年月日数を委く計拵げれば四十余年なり、其の間の所説の経を挙るに華嚴・阿含・方等・般若なり所談の法門は三乘・五乘・所習の法門なり修行の時節を定むるには宣説菩薩歴劫修行と

云いひじ随ず自い意じ・随ず他いた意いたをわか分わかつには是これをず随いた他いた意いたとの宣よんじゆつべつ四よねん十じゆ余ねん年ねんの諸經きやうと

八はち箇か年ねんの所說せつとの語ご同どうじく義ぎ替かへる事ことを定めるには文もん辭じ一いつと雖ど

義ぎ各かく異いとすけり成じやう仏ぶつの方は別にして往生じやうの方は一つなるべしとも

おおぼおええずず華け嚴げん・方ほう等とう・般はん若にや・究く竟きやう最さい上じやうの大乘だいじやう經きやう・頓とん悟ご・漸ぜん悟ごの法門ほうもん・

皆みな未み顕けん真しん実じつと

說せつかれたり此この大部だいぶの諸經しよきやうすら未み顕けん真しん実じつなり何いかに況

や淨土じゆつどの三部さんぶ經きやう等とうの往生じやう極ごく樂らくばかり未顕けん真しん実じつの内にもれんや其の上

・經きやう經きやうばかりを出いだすのみにあらず既に年月ねんげつ日じつ数すうを出すをや然れば

華け嚴げん・方ほう等とう・般はん若にや等とうの弥陀みだ往じやう生じやう已すでに未顕けん真しん実じつなる事こと疑ぎい無し觀經かんきやう

の弥陀みだ往じやう生じやうに限つて豈あたる難なん故この内に入らざらんや若し隨自ず意いの

法ほ華け經きやうの往生じやう極ごく樂らくを隨他いた意いたの觀經かんきやうの往生じやう極ごく樂らくに同じて易い行ぎやう道だうと定

めて而しかも易行ぎやうの中に取つても猶觀な經おかんきやうの念仏ねんぶつ往じやう生じやうは易行いぎやうなりと之を立

てられば權けん實じつ雜ざつ亂らんの失大だ謗ぼう法ほうたる上じやう一いつ滴てつの水漸ぜん漸ぜんに流れて大たい海かいとな

り一塵積つて須弥山となるが如く漸く権經の人も実經にすすま
実經の人も権經におち権經の人次第に國中に充滿せば法華經
隨喜の心も留り國中に王なきが如く人の神を失えるが如く法華
真言の諸の山寺荒れて諸天善神・竜神等一切の聖人國を捨てて去
らば悪鬼便りを得て乱れ入り悪風吹いて五穀も成らしめず疫病
流行して人民をや亡さんずらん、此の七八年が前までは諸行は永く
往生すべからず善導和尚の千中無一と定めさせ給いたる上選択には
諸行を抛てよ行ずる者は群賊と見えたりなど放語を申し立てし
が、又此の四五年の後は選択集の如く人を勧めん者は謗法の罪によ
つて師檀共に無間地獄に墮つべしと經に見えたりと申す法門出来した
りげに有りしを、始めは念仏者こそりて不思議の思いをなす上念仏を
申す者無間地獄に墮つべしと申す悪人外道ありなんどののしり候し

が念ねんぶつ仏者むげんじしやく・無間地獄むげんじしやくに墮おつべしと申もうす語ごに智慧ちえつきて各おのおのせんぢやくしゆ 選択集せんぢやくしゆを
委くわしく披見ひけんする程ほどにげにも謗法ぼうほうの書しよとや見みなしけん千中無せんぢゆうむいつ一の悪義あくぎを
留とどめて諸行往生しよぎやうじやうじゆの由よしを念仏者ねんぶつ毎ごとに之これを立たつ、然しかりと雖いえども唯ただ口くちにのみ
ゆるして心こころの中なかは猶本なおもとの千中無せんぢゆうむいつ一の思しいなり在家ざいけの愚人ぐにんは内心ないしんの謗法ぼうほう
なるをばしらずして諸行往生しよぎやうじやうじゆの口くちにばかされて念仏者ねんぶつは法華經ほけきやうをば
謗ほうぜざりけるを法華經ほけきやうを謗ほうずる由よしを聖道門せうだうもんの人の申もうされしは僻事ひがごと
なりと思おもへるにや、一向いっかう諸行しよぎやうは千中無せんぢゆうむいつ一いつと申もうす人ひとよりも謗法ぼうほうの心こころは
まさりて候たがなり失とがなき由よしを人に知しらせ而しかも念仏計ねんぶつげかりを亦また弘ひろめんとた
ばかるなり偏ひとえに天魔てんまの計ほかりごとなり。

問いうて云いく天台宗てんだいしゆの中なかの人の立たつる事ことあり天台大師てんだいだいにせん爾前にぜんと法華ほけと
相対そうたいして爾前にぜんを嫌きらうに二義にぎあり、一いちには約部やくぶ四十余年よんじゆうよねんの部ぶと法華經ほけきやう
の部ぶと相対そうたいして爾前にぜんはそなり法華ほけは妙めいなりと之これを立たつ二にには約教やくきやう。

う事あり、三には爾前の円をば別教に撰して前三教と嫌ひ法華の円をば純円と立つ四には爾前の円をば法華に同ずれども但法華經の二妙の中の相待妙に同じて絶待妙には同ぜず、此の四の道理を相對して六十卷をかんがつれば狐疑の氷解けたり一の証文は且つは秘し且つは繁き故に之を載せず、又法華經の本門にしては爾前の円と迹門の円とを嫌う事不審なき者なり、爾前の円をば別教に撰して約教の時は前三為 後一為妙と云うなり此の時は爾前の円は無量義經の歴劫修行の内に入りぬ、又伝教大師の註釈の中に爾前の八教を挙げて四十余年未顕眞実の内に入れ、或は前三教をば迂回と立て爾前の円をば直道と云い無量義經をば大直道と云う委細に見る可し。

問うて云く法華經を信ぜん人は本尊並に行儀並に常の所行は何に

てか候べき、答えて云く第一に本尊は法華經八卷・一卷・一品、或は題

目を書いて本尊と定む可しと法師品並に神力品に見えたり、又た念

らん人は釈迦如来、多宝仏を書いても造つても法華經の左右に之を立

て奉るべし、又た念たらんは十方の諸仏普賢菩薩等をもつくりかきたて

まつるべし、行儀は本尊の御前にして必ず坐立行なるべし道場を出で

ては行住坐臥をえらぶべからず、常の所行は題目を南無

妙法蓮華經と唱うべし、た念たらん人は一偈・一句をも読み奉る可し

助縁には南無釈迦牟尼仏・多宝仏・十方諸仏・一切の諸菩薩・二乗・

天人・竜神・八部等心に随うべし愚者多き世となれば一念三千の觀

を先とせず其の志、あらん人は必ず習学して之を觀ずべし。

問うて云く只題目計を唱うる功德如何、答えて云く釈迦如来、

法華經をとかんとおぼしめして世に出で、ましまししかども四十余年

の程は法華經の御名を秘しおぼしめして御年三十の比より七十余に
 至るまで法華經の方便をまうけ七十二にして始めて題目を呼び出さ
 せ給へば諸經の題目に是を比ぶべからず、其の上法華經の肝心たる
 方便・壽量の一念三千・久遠実成の法門は妙法の二字におさまれ
 り、天台大師・玄義十卷を造り給う第一の卷には略して妙法蓮華經
 の五字の意を宣べ給う、第二の卷より七の卷に至るまでは又広く妙の
 一字を宣べ八の卷より九の卷に至るまでは法蓮華の三字を釈し第十の
 卷には經の一字を宣べ給へり、經の一字に華嚴・阿含・方等・般若・
 涅槃經を収めたり妙法の二字は玄義の心は百界・千如・心仏衆生の
 法門なり止觀十卷の心は一念三千・百界・千如・三千世間・心仏衆生
 ・三無差別と立て給う、一切の諸仏菩薩・十界の因果十方の草木・
 瓦礫等・妙法の二字にあらずと云う事なし、華嚴・阿含等の

よんじゅうねん 四十余年の経きやう 小乗じょう 經の題目には大乘だいじやう 經の功德くどく を収おさめず又また

大乘だいじやう 經にも往生じやうじやう を説とくく經の題目には成じやう 仏の功德くどく をおさめず又また王わうに

ては有あれども王わう中の王わうにて無なき經も有あり仏も又また經に隨したがつて他たが仏の

功徳くどくをおさめず平等びやうどう 意趣いしゆをもつて他たが仏ぶつととをなじといひある或あるは

法身ほふしん平等びやうどう をもて自じ 仏ぶつ 他たが 仏ぶつ 同どう じといふ、實じつには一いつ 仏ぶつ に一切いつさい 仏ぶつ の功徳くどく を

おさめず今いま 法華ほふけ 經は四十余年よんじゅうねん の諸經しよきやう を一經いつきやう に収おさめて十方じふぱう 世界せかい の

三身さんじん 円満えんまん の諸しよ 仏ぶつ をあつめて釈迦しやくか 一いつ 仏ぶつ の分身ぶんしん の諸しよ 仏ぶつ と談だん ずる故ゆえ に一いつ 仏ぶつ

一切いつさい 仏ぶつ にして妙法みよほふ の二字にじ に諸しよ 仏ぶつ 皆みな 収おさ まれり、故ゆえ に妙法蓮華みよほふれんげきやう 經の

五字ごじ を唱とな うる功徳くどく 莫ばく 大だい なり諸しよ 仏ぶつ ・諸經しよきやう の題目だいもく は法華ほふけ 經の所開しよかい なり

妙法みよほふ は能開もつ なりとしりて法華ほふけ 經の題目だいもく を唱とな うべし。

問い づて云い く此こゝ の法門ほふもん を承うけたま わつて又また 智ち 者しや に尋たず ね申もう し候まう えば法華ほふけ 經のい

みじき事こと は左右さう に及およ ばず候た 但ただ し器量きりやう ならん人ひと は唯ただ 我われ が身計みか 計けい りは然しか 然しか

可べし、末代まつだいの凡夫ほんぶに向つてただちに機をも知らず爾前にぜんの教を云いいつと
 法華經ほけきょうを行ぜよと申もうすはとしごろの念仏ねんぶつなどをば打ち捨て又
 法華經ほけきょうには未いまだ功も入れず有にも無にもつかぬようにてあらんずら
 ん、又機も知らず法華經を説かせ給たまはば信ずる者は左右さうに及およばず
 若もし謗ほうずる者あらば定めて地獄じじくに墮おち候そひはんずらん、其その上う上じやうも
 四十余年の間よんじゆつよねん法華經を説き給たまはざる事は若但讚にやくだんさんぶつじやう仏乘しゆじやうほつざい・衆生没在苦
 の故ゆゑなりと在世ざいせの機なほしかすら猶然いかにいわんやまつだいなり何いかに況なほや末代ほんぶの凡夫ほんぶをや、されば
 譬諭品ひゆほんには「仏しやりほつ・舍利弗しやりほつに告のたまげて言むわく無智むちの人の中に此この經を説く
 ことなかれ」云云此等の道理を申こすは如何いかにが候むべき、答こたえて云いく智者ちしや
 の御物語おんものがたりと仰おほせ承たまり候むへば所詮しよせん末代まつだいの凡夫ほんぶには機をかがみて説いけ
 左右さうなく説いいて人に謗ほうぜさする事なかれとこそ候むなれ、彼人かのひとさやう
 に申もうされ候むはば御返事ごへんじ候むべきやうは抑おさ若但讚そまそまにやくだんさんぶつじやう仏乘ないしむ・乃至無智人ちになちやう中

等の文を出し給はば又一經の内に凡有所見我深敬汝等等と説いて
不輕菩薩の杖木瓦石をもつてうちはられさせ給いしをば顧みさせ
給はざりしは如何と申させ給へ

問うて云く一經の内に相違の候なる事こそよに得心がたく侍れば
くわしく承り候はん、答えて云く方便品等には機をかがみて此の經を
説くべしと見え不輕品には謗ずとも唯強いて之を説くべしと見え侍り
一經の前後水火の如し、然るを天台大師会して云く「本已に善有るは
釈迦小を以て之を將護し本未だ善有らざるは不輕大を以て之を
強毒す」文・文の心は本と善根ありて今生の内に得解すべき者の為
は直に法華經を説くべし、然るに其の中に猶聞いて謗すべき機あらば
暫く權經をもてこしらえて後に法華經を説くべし、本と大の善根も
なく今も法華經を信ずべからずなにとなくとも惡道に墮ちぬべき

故に但押して法華經を説いて之を謗ぜしめて逆縁ともなせと會する
文なり、此の釈の如きは末代には善無き者は多く善有る者は少し
故に悪道に墮ちんこと疑い無し、同くは法華經を強いて説き聞かせ
て毒鼓の縁と成す可きか然らば法華經を説いて謗縁を結ぶべき時節
なる事争い無き者をや、法華經の方便品に五千の上慢あり
略開三顯一を聞いて広開三顯一の時、仏の御力をもて座をたたしめ
給ふ後に涅槃經並に四依の辺にして今生に悟を得せしめ給うと、
諸法無行經に喜根菩薩、勝意比丘に向つて大乘の法門を強いて説き
きかせて謗ぜさせしと、此の二の相違をば天台大師會して云く「如来
は悲を以ての故に発遣し喜根は慈を以ての故に強説す」文・文の心は
仏は悲の故に後のたのしみをば闇いて當時、法華經を謗して地獄にを
ちて苦にあうべきを悲み給いて座をたたしめ給いき、譬えば母の子

に病あると知れども当時の苦を悲んで左右なく灸を加へざるが
如し、喜根菩薩は慈の故に当時の苦をばかへりみず後の樂を思いて
強いて之を説き聞かしむ、譬えば父は慈の故に子に病あるを見て当時
の苦をかへりみず後を思ふ故に灸を加うるが如し、又仏在世には仏
法華經を秘し給いしかば四十余年の間等覺不退の菩薩名をしらず、
其の上寿量品は法華經八箇年の内にも名を秘し給いて最後にきかし
め給いき末代の凡夫には左右なく如何がきかしむべきとおぼゆる処
を妙樂大師釈して云く、「仏世は当機の故に簡ぶ末代は結縁の故に聞
かしむ」と釈し給へり文の心は仏在世には仏一期の間多くの人不退の
位にのぼりぬべき故に法華經の名義を出して謗せしめず機をこしらへ
て之を説く仏滅後には当機の衆は少く結縁の衆多きが故に多分に
就いて左右なく法華經を説くべしと云う釈なり是体の多くの品あり

又未代まつだいの師は多くは機を知らず機を知らざらんには強しいて但ただ実経を説くべきかされば天台大師の釈しやくに云く「等ごしく是れ見ざれば但大を説くに咎とが無し」文・文の心は機をも知らざれば大を説くに失とがなしと云う文なり又時の機を見て説法せっぽうする方もあり皆國中みなくにの諸人・権経を信じて実経を謗し強あながちに用いざれば彈呵だんかの心をもて説くべきか時に依つて用否もちひあるべし。

問いうて云く唐土たうどの人師にんしの中に一分一向いちぶんいっこうに権大乘こんだいじやうに留つて実経じつきやうに入らざる者はいかなる故か候、答えて云く仏世ぶつぜに出いでましまして先ずよんじやうよねんよねんの権大乘こんだいじやう・小乗しやうじやうの経を説き後には法華経ほけきやうを説いて言のたまわく四十余年しじゆふねんの権大乘こんだいじやう・小乗しやうじやうの経を説き後には法華経ほけきやうを説いて言のたまわく「若しや以小乗化しやうじやう乃至な至いた於に一人我則墮慳貪がそくだけんどん・此事じじ為不可たが文・文の心はほ但ただ爾前にぜんの經許ばかりを説いて法華経ほけきやうを説き給たまはずは仏慳貪けんどんの失とがありと説いかれたり、後そに屬累品ぞくるいぼんにいたりて仏右みの御手てをのべて三たび諫いめを

なして三千大千世界の外

八方・四百万億那由他の国土の諸菩薩の

いたなき

頂をなでて未来には必ず法華經を説くべし、若し機たすば余の

深法の四十余年の經を説いて機をこしらへて法華經を説くべしと見え

たり、後に涅槃經に重ねて此の事を説いて仏滅後に四依の菩薩ありて

法を説くに又法の四依あり実經をついに弘めずんば天魔としるべきよ

しを説かれたり故に如来の滅後後の五百年・九百年の間に出で給い

し竜樹菩薩・天親菩薩等 如来の聖教を弘め給うに天親菩薩は

先に小乗の説一切有部の人 俱舍論を造つて阿含十二年の經の心を

宣べて一向に大乘の義理を明さず次に十地論 撰大乘論・釈論等を

造つて四十余年の権大乘の心を宣べ後に仏性論・法華論等を造りて

粗実大乘の義を宣べたり 竜樹菩薩亦然なり天台大師・唐土の人師と

して一代を分つに大小・権実顯然なり余の人師は僅かに義理を説け

ども分明ならず又証文たしかならず但し末の論師並に訳者・唐土の
人師の中に大小をば分つて大にをいて権実を分たず 或は語には分つ
といへども心は権大乘のをもむきを出でず此等は不退諸菩薩・
其数如恒沙・亦復不能知とおぼえて候なり。

疑つて云く唐土の人師の中に慈恩大師は十一面觀音の化身牙より
光を放つ、善導和尚は弥陀の化身口より仏をいだすこの外の人師通を
現じ徳をほどこし三昧を発得する人・世に多しなんぞ権実二経を
弁へて法華経を詮とせざるや、答えて云く阿闍多仙人外道は十二年
の間・耳の中に恒河の水をとどむ婆藪仙人は自在天となりて三目を
現ず、唐土の道士の中にも張階は霧をいだし鸞巴は雲をはく第六天
の魔王は仏滅後に比丘・比丘尼・優婆塞・優婆夷・阿羅漢・辟支仏の形
を現じて四十余年の経を説くべしと見えたり通力をもて智者愚者を

ばしるべからざるか、唯ただ仏ゆいの遺言いごんの如ごとく一向いっこうに権経ごんけいを弘ひろめて実経じつけいをつ
みに弘ひろめざる人師にんしは権経ごんけいに宿習しゆくじゆくありて実経じつけいに入いらざらん者は或あるは魔ま
にたぼらかされて通とを現げんずるか、但ただし法門ほふもんをもて邪正じやじやうをただすべし
利根りこんと通力つうりきとはよるべからず。

ぶんおうがんにん
文応元年太歳庚申五月二十八日

にちれん
日蓮

かおう
花押

かまくらなごえ
鎌倉名越に於て書き畢おわんぬ